第１０課　歴史としての聖書

【暗唱聖句】

「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」出エジプト20:2

【日曜日・ダビデ、ソロモン、そして王制】

ダビデやソロモンといえば、イスラエルの黄金時代を象徴する王様です。もし彼らが存在していなかったとしたら、聖書の中身も大きく変わっていたことでしょう。しかし、彼らが実際に実在した人物であり、聖書の記述が真実であることは、考古学の発展により次々に明らかになっています。たとえば、サムエル記上17章に出てくる戦いの戦線における地理的状況が、キルベット・キヤファの遺跡発掘により真実であったことが明らかになりました。このキルベット・キヤファというのはユダヤの要塞都市であり、ダビデがペシシテの巨人戦士ゴリアト（ゴリアテ）を倒した際、逃げ出したペリシテ軍をうち滅ぼした地シャアライムのことだと考えられています。

「イスラエルとユダの兵は立って、鬨の声をあげ、ペリシテ軍を追撃して、ガイの境エクロンの門に至った。ペリシテ人は刺し殺され、ガトとエクロンに至るシャアライムの道に倒れていた」サムエル記上17章52節

また、最近ではキルベット・アライ遺跡の発掘により、ダビデがサウル王から逃亡していた際、隠れ住んでいた町ツィクラグだったのではないかと考えられています。この遺跡からは、ペリシテ人の居住地であった証拠とダビデの居住地であった証拠の両方が見られることから、この地こそツィクラグであるとする結論に行き着いたと言われています。聖書に登場する人物や地名が真実であることが、考古学によって証明されることによって、聖書そのものの真実性がより一層確かなものとなります。

【月曜日・古代の文献における天地創造】

アッシリアの首都であるニネヴェのセンナケリブ王の宮殿の壁には、ラキシュが陥落したことを記念するレリーフが作られていました。これは現在、大英博物館に展示されていますが、このレリーフには、アッシリア兵による攻城戦の様子やラキシュから捕虜を得て凱旋する様子が描かれています。このラキシュという町は、エルサレムから南西45kmに位置するイスラエルの入植地の一つですが、もともとはアムル人の都市国家でした。しかし、ヨシュアが率いるイスラエル人がカナンに進行し、エリコとアイを攻め滅ぼしたのち、このラキシュも攻略したのでした。ラキシュは最初ユダ族の相続地になりますが、イスラエル王国分裂後はレハブアムを初代国王とするユダ王国に含まれます。ところがヒゼキヤ王の時代に、アッシリアの王センナケリブが率いるアッシリア軍に包囲されてしまうのです。この様子については歴代誌下32章に詳しく書かれてありますが、この出来事が真実であったということが、このセンナケリブのレリーフが発見されたことによって明らかになったわけです。レリーフには、アッシリア兵による攻城戦の様子やラキシュから捕虜を得て凱旋する様子が描かれています。また、ラキシュの遺跡からは、その際に焼け落とされた跡と大量の残骸が発見されています。しかし、このときエルサレムは神様が遣わされた天使によって守られました。これはイザヤが37章で予言したと通りです。

「それゆえ主はアッシリアの王についてこう言われる。彼がこの都に入城することはない。またそこに矢を射ることも、盾を持って向かって来ることも、都に対して土塁を築くこともない」イザヤ37:33

センナケリブ王はエルサレムを1日包囲したのみで、退散したのでした。

【火曜日・ダニエル、ネブカドネツアル、そしてバビロン】

新バビロニアのネブカドネザル2世のときに、巨大な都市が築かれました。300以上もの神殿や見事な宮殿があり、街は巨大な二重の城壁で守られていました。その城壁には8つの主要な門があり、バビロンの主要な王朝にちなんだ名前が付けられていましたが、その中でも最も有名なのが美しい青色に輝くイシュタル門です。1930年代にはイシュタル門の周囲の発掘とともに復元もされています。このような、かつてのバビロンの巨大帝国の跡を見る時、そこにダニエルをはじめとするイスラエルの民が捕囚とされていた事実を、感慨深く思わされます。また、2007年に、バビロンの王ネブカドネツアルの時代の石版が発見されましたが、そこには、エレミヤ書39:3で言及されている「サル・セキム」というバビロンの役人の名が刻まれており、聖書のバビロニア捕囚時代の物語の真実がより一層確かなものとなりました。バビロン捕囚時代には、神様はダニエルを用いて、数々の預言をなさいましたが、歴史的な真実性が証明されることで、その預言の言葉にも真実みが増します。

【水曜日・歴史上のイエス】

イエス・キリストを歴史上の人物として否定する人はいないでしょう。それは聖書だけでなく、他の書物にも色々と登場するからです。有名なのがユダヤ人歴史家のヨセフスが記したものです。ヨセフスの記した『ユダヤ古代誌』の中には、イエス・キリストのことだけでなく、他の人の名前も色々登場します。その中に、イエスを殺そうとした大祭司カイアファについての記述も出てきます。1990年にエルサレムの南である一族の墓が発見されたのですが、その棺の中になんと「カイアファの息子ヨセフ」と書かれたものがありました。実は、これは大祭司カイアファの正式な名前で、カイアファというのは実は彼の父親の名前のようです。また、ローマの歴史家タキトゥスの書物の中にも、ピラトがキリストを処刑したことがはっきりと記されています。そのピラトについては、1961年には、カエサリア・マリティマ劇場の石に、ポンテオ・ピラトの名前を刻む碑文も見つかっています。

【木曜日・信仰と歴史】

聖書を歴史書として見るならば、同じ時代に書かれた他の文献と比較した場合、最も信頼のおける書物だと言えるでしょう。神様の霊感によって書かれたからこそ、これほどまで正確に書き記すことができたのです。また、聖書の歴史は神様が人類にどのように関わってこられたのかという歴史であり、また信仰者がどのように生きたのという歴史でもあります。ノアもアブラハムもモーセも、聖書に出てくる偉大な信仰者は、ただ神様を信じるだけでなく、常に行動が伴っていました。その行動とは、神様の御心を生きるということであり、それがクリスチャンの歴史を築き上げてきたのです。現代に生きるわたしたちも同様に、神様を信じ、御心を生きるものでありたいものです。